

沖繩古語シノをめぐって

田 中 綾

一、はじめに

沖繩の古代歌謡集『おもろさうし』には、テルカハとテルシノと呼ばれる太陽神が対語として登場する。このうち、テルカハのカハについては、現在のところ、本来太陽を意味する語であったということに解釈が定まっている。しかし、テルシノのシノについては、その意味はよくわかっていない。本稿では主に、そのシノの原義について考えていきたい。

二、テルカハとテルシノ

右に述べたように、テルカハとテルシノの両語は、共に太陽神を表す語とされているが、まずは仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典総索引・第二版』（角川書店）で両語の詳しい説明を見てみることにする（本稿で他文献から記述を引用する場

合、特に断りのない部分の傍線・傍点は、もともと原文にあるものである）。

てるかは（照る日） 太陽。日神。「てだ」が太陽の物質性をいうのに対して、太陽の神性を示す。「かは」が太陽の古名であり、新名称「てだ」の出現で神性を示すようになったと考える。原注にも「てだ也」（四二〇七）、「てだの事」（四一五四）、「てだノ事也」（四一九九）、「御日之事」（五二三三）、「御日の事」（五二三三）、「御日ノ事」（十三七六六）とある。『混集（坤、乾坤）』に「御日の事」とある。

〔例〕 きみく／＼か、いのらは、一か、まふらは（三二一一）

てるしの 太陽。日神「てるかは」の異称。太陽を意味する「てるかは」の「かは」が本来の太陽を意味したように、「てるしの」も「しの」に本来の意味があったの

であろう。「しの」の原義は未詳であるが、仲原善忠氏は「しののめ」の「しの」と関係があらうといわれる。

原注には「御月之事」(五二三三)とある。「てるかは」参照。

【例】 てるかはが、おざし、一か おざし(二三九)

次いで、外間守善『おもろ語辞書』(角川書店)における説明を見る。

てるかは **坤・乾坤**

【原注】 御日の事

【注釈】 太陽。「てだ」が太陽の物質性をいうのに対し、「てるかは」は、太陽の神性を示す。「かは」が太陽の古名で、「てる」は照るの意の美称辞だったと考える。

原注に「御日の事」、おもろ原注に「てだ也」「御日の事」とある。

おもろ例「君々が、祈らば、てるかはが、守らば」(3・25・一一二)

てるしの **坤・乾坤**

【原注】 右に同

【注釈】 太陽。原注に「右に同」とあるのは、前出語「てるかは」に同じの意。日神「てるかは」の異称。前項参照。おもろ原注に「御月之事」とあるが間違いであらう。おもろ例「てるかはが、御差し、てるしのが、御差し」

(1・39・三九)

このように、テルカハのカハについては、一般に、太陽を表す語と解されているのに対し、テルシノについては、月と太陽の二つの解釈があり、シノという語についても明確な説明はなされていない。また、『おもろ語辞書』では注釈として外間説が示されているのだが、ここではテルシノを「月」と見る説は否定され、テルカハの異称、つまり、太陽や太陽神のみを表す語とみなされている。

続いて、仲原善忠『おもろ新釈』(琉球文教図書)の中にシノノメとテルシノとの関係について記されている部分があるので、次に引用する。

テルカハは、照る日^カで、カは日の古語、五日六日の「カ」で、テルシノのシノも同義と見られる。シノノメ(東雲)のシノも、おそらく日を意味する語で、シノクリヤ(日を繰る人、吉日を選ぶ人)コイシノ(右と同義か)などの語がある。(八〇頁。傍線引用者)

テルカハの対語はテルシノで、テルカが照る日ならば、照るシノも照る日又は照る月のいづれかにちがいない。対語は必ずしも同義語ではないから、実体を明らかにすることは出来ないが、シノノメ(あかつき)のシノと何等の関係がないか。(二四四頁。傍線引用者)

この二種の記述のうち、二四四頁の記述では、テルシノが「月」である可能性も認めているが、八〇頁の方では、外間説と同じように、「月」であることは否定し、シノは「日」を指す語であると捉えている。さらに、仲原説では、大和古語と沖繩古語のシノは同源であると考えている。(大和古語との関連については本稿の「六」で述べる)。

いずれにしても、テルカハに対する見解は、「太陽」「日神」ということで一致し異論がないが、テルシノについては、先行研究を参照しても、明確な見解は出ていないのである。

三、美称辞シノ

テルカハとテルシノについて現行の解釈を見てきたところで、以下、テルシノの原義を考えていく。その際に問題とすべき点は、やはりシノの部分であろう。テルは、その語形から考えても、「照る」の意味以外は考えられそうにないからである。

シノについて考えるにあたり、まずは、美称辞として使われるシノを見てみる。この「聖なる」という意味の美称辞シノが、実際どのような語に使われているのかを、沖繩古語大辞典編集委員会『沖繩古語大辞典』(角川書店)から列挙する。

しのーいきあひ【しのーいき逢ひ】**古** ①神同士の出会い。

「しの」は「しのたばる」の「しの」と同じで、聖なる、立派な、の意であろう。《うらちやうえーねー／いちや

たる／しぬちやうえーねー／ゆやたる》**古** ウ三三〇、六七) ②立派な行き逢い。《浦いきあひ めしやうち／せんいきやあひ／めしやうち》**古** ウ四九一四五) **語形** しぬちやうえーしぬちやうえーしぬちやえーしぬちやえーしぬちやうづえ・せんいきやあひ・せんいきやわい

しのーたばる【しの田原】**古** 田圃の美称。「しの」は、聖なる、の意の接頭辞。《しぢく／引きわけて／ちが目型 挿し植えて／しの田原 持ち下ち／樹の 型 さし植えて》**古** ク五九一十七) **語形** しのたはる・しの田原・しる田はる・しる田ばる・しんちやばる・しんぬ田原原

しのーみち **古** 未詳語。「立派な水」か、「立派な溝」か。《くみのーしみてい／しんちやばる／しぬみち／たたんつぬ／かふーさーが》**古** ウ三三六五九) **語形** しぬみち

しのーみどり **古** 田圃の美称。りっぱな田。語源は「聖なる緑」で、青々と稲の葉の茂った田をいうか。あるいは、「しの実取り」か。《た、みきよが／しのたはる／しのみとり／雨ほしやに／水ほしやに》**古** オ三八七)

語形 しのみとり
しのーみばる【しのみ原】**古** 田畑の美称。立派な畑。《なもじ おしわけて／しる田ばる／しのみばる 降り下るちへ たばうれ》**古** ウ五六二二五) **語形** しのみはる・しのみばる

同辞典には、美称辞として使われている右の五語しか見当たらない。

ここで、この五語のうち、シノタバル、シノミドリ、シノミバルの三語が、田圃または田畑の美称として使われていることに注目したい。そして、残るシノイキアヒ、シノミチの二語は、見出し語では確かに「しのー」となっているが、語形欄を見ると「しぬー」と表記されており、「しのー」とは書かれていない。シノイキアヒの説明では、「しの」は『しのたばる』の「しの」と同じ」と記されており、シノミチの説明では、「立派な水」か、「立派な溝」か。」と記され、いずれも美称辞シノとの結び付きが示されているが、語形が「しのー」ではなく「しぬー」であるから、これら二語のシノは美称辞シノとは違うものと考えておいた方がよいのかも知れない。

そうすると、シノが美称辞として使われている語は、全て田圃や畑に関係する語となる。このような偏りを考慮すると、シノを単に「聖なる」の意の美称辞として片付ける前に、その原義を問わねばなるまい。

そこで一案として、以下のような考えを提示したい。シノは、「聖なる」の意を表す美称辞とされているが、元来、田圃や畑に関する具体的な何かを意味していた語なのではないだろうか。そして勿論、美称辞として使われるようになるためには、シノが意味していた具体的な何かは、そのものが「聖なる」ものでなければならぬ。では、その「聖なる」ものとは何であろう。

『沖繩古語大辞典』には、以下のような美称辞シノの説明が見られる。

しの接素 光・太陽の原義から派生して、「聖なる」の意の美称辞となる。「しのいきあひ」「しのたばる」など。

補説「てるしの」「あけしの」「しの」「てるしな」の「しな」は、光・太陽の義から太陽の靈性・神性をいう語になったもの。日本語の「しののめ」「しの」も関係あるか。

この説明によると、テルシノのシノの原義は「光、太陽」で全く問題がないかのようだ。しかし、同辞典のテルシノの項ではなぜか原義未詳とされており、一貫した説明になっていない。村山七郎「しなてる・てるしの考」（『国語学』第八二集、昭和四五年九月）は、シノの原義を光とする点で、右記のシノの説明と結果的に同じである。村山説では、まずテルシノが「太陽、日神」のみならず「御月之事」をも意味することを指摘し、一方で、「太陽」を表すテルカハがあるところから、シノをもともと「光」の意であったと推定する。さらに、大和古語の枕詞シナテルのシナと『おもろさうし』におけるシノ、それとシナとは母音交替の関係にあり、これらの語はオーストロネシア承言語の *mana*（光）につながっていくと結論付けている。

確かに、『沖繩古語大辞典』や村山説に言うように、光や太陽は「聖なる」ものとなり得るから、そこから靈性を表すよう

になつたという見解は首肯できる。そして、シノが光や太陽を意味するという説も一応理解はできる。

しかし、光、太陽から靈性に結び付き、さらに「聖なる」の意の美称辞となつたとすると、先に指摘したように、シノが美称辞である語に、田圃や畑に関連するものが目立つという点はどのように考えればよいのだろうか。その事実とシノの原義との結び付きを合理的に説明するためには、田圃や畑に関連する具体的な何かをシノが指している、そこからシノが「光」を表すようになり、さらに美称辞シノが成立していったと考えるべきではないか。そうした前提に立つて、シノが元来指していたものについて、次に考えていきたい。

四、大和古語とのつながり

外間守善『日本語の世界9』（中央公論社）に注目すべき記述がある。

稲を意味する古代日本語の「しね」も、沖縄古語で解くとすれば「あまみきよ しねりきよ」（祖先神）が「あまみ人 しのみ人」（祖先神）と通ずるところから「しね」と「し」は通ずることになるし、稲に対する尊崇の気持から、照り輝いて美しいもの、聖なるもの、すなわち「しね」「しね」といったことができそうである。（一八九頁。傍線引用者）

このように、外間説では、シノと大和古語で稲を表すシネとが同源であると説いている。これに従うべきであろう。シノとシネとは、sinを共通の語根としてもつ同源の語で、シノが結び付いていたあるものとは、ここで指摘されているように、「稲」であると思われる。

ここで、シネという語について確認しておく。シネは、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎『岩波古語辞典補訂版』（岩波書店）に、

しね【稲】「いね」に同じ。他の語の下につく時に使う。

「十握（と）」を浅甕（あさ）に醸める大御酒」へ紀顯宗即位前。「御（み）」一つく女（な）」へ神楽歌四九」

とあるように、大和古語では、稲を意味する語である。

ところで、沖縄古語には、シラタネという、稲に対する尊崇の気持を伴う語がある。この語に関する説明を『沖縄古語大辞典』で見してみる。

しらたね【白種子】**オ古**疏ナシラニ ①きれいな種子。

《電宮から／あまぢやに／しらぢやに／わしぬといが／くくりもーち》**古** オー八一―四 ②稲のこと。オモ

口原注に「稲之事、爪生茂たるを言」（一五卷一一〇三）とある。爪はノギのことか。《たいら まさりきよか

あかはんた のほて おほたはる みやれは しらちや
ねの よりなひく きよらや」**【オ】**一六卷一一六七」
《穂花 咲き出れば ちりひぢも つかぬ 白ちやねや
なびきあぶしまくら》**【琉】**全一四九」**【補説】**「しらきや
ね」**【古】**ウ一五八七」は、「白種子」か（歌謡大成）。
（語形略。傍線引用者）

先の外間説では、このような稲の捉え方をふまえて、シネ、シノが「聖なる」ものに至る過程を「稲に対する尊崇の気持から」と説明する。また、たわわに実った稲穂が風に靡く様は、キラキラと、照り輝くように美しく見える。その情景は、まさに「しらちやねの よりなひく きよらや」というオモロの一節と重なる。このことを考えても、

しの₁稲↓照り輝く美しいもの↓（光）↓「聖なる」もの
という変化の図式は成り立つであろう。

このように、シノという語が本来的には「稲」を表したものと仮定すると、先に見たシノタバル、シノミドリ、シノミバルの三語が全て田圃、田畑に関する語であったという事実と見事に符合する。

シノは本来、照り輝く美しいものである「稲」を指す語で、そこから光るものに対する美称としての用法が生じ、「聖なる」意の美称辞として使われるようになった、というのがここでの結論である。

五、神祭りシノグとシノ

次に、神祭りシノグについて触れたい。沖縄には神祭りシノグが古来から伝わっている。シノグは、収穫後、次の農作に移る前に行われる、稲の豊作の感謝と子祝の祭りである。

このシノグの語源に関しては、外間説、仲原説があるので、『沖縄古語大辞典』におけるシノグの補説でその語源説を確認しておく。

【補説】シヌグは、シノグラ、シノグリ、シノグル、シノグレと活用する動詞からきた名詞といわれ（伊波普猷「祭祀舞踏」、語源的には、シノ（目）クリ（繰り）とする説（仲原善忠「おもろ新釈」全集二卷二四五）、シノ（聖なる）コネリ（踊り）とみる見方（外間守善）などがある。オモロの「しのくりよわる」（二卷七五）、「しのこて」（二卷一三九九）、「しのくりや」（二卷六三七）などの「しのくり」につながる。

私見では、このシノグのシノも、元来「稲」を表し、美称辞へと展開していったシノであろう、と考える。シノグが、神祭りという神聖な行為である以上、外間説に言うように、シノグのシノが美称辞の意味を表しているとするとその説には従うべきである。また、シノグが、豊作への感謝や子祝をする神祭りである

ことから、シノグのシノが元来「稻」を表したと考えるのは自然なことであろう。そして、シノが田畑に関係する語と結び付き、最終的に「聖なる」の意の美称辞となることも用法の展開としてありえよう。(ただし、シノグのグが何であるかは不明)。こうして、シノグが美称辞シノと結び付くと見ると、シノが「稻」を表したという先の結論がより確実なものになってくるだろう。

六、大和古語シノノメとの関係

最後に、大和古語シノノメと沖繩古語シノとの関係について触れておく。

「二」で見た通り、仲原説では、シノノメの意味を(あかつき)と示し、シノノメのシノと、テルシノのシノとの関係を示唆しているのだが、果たしてそれは正しいのだろうか。まずは、シノノメに関する諸説を、④『日本国語大辞典』(小学館)、⑤『角川古語大辞典』(角川書店)、⑥『時代別国語大辞典・上代編』(三省堂)の順に列挙する。

④しののめ【東雲】《名》①東の空に明るさが、わずかに動くころ。転じて、あけがた。夜明け。(用例略) ②明け方に、東の空にたなびく雲。(用例略) ③(―する)明けがたの光を受けること。曙光を受けているとられること。(用例略)

⑤しののめ【東雲・篠目】《名》夜明け方。暁(つあき)が明け方に近づきながらまだ明けやらぬ間。後朝(ごあき)の別れの刻時である。古代の原始的住居においては、明かり取りに篠竹(しのけ)を粗く交錯させて編んだ。これを篠目(シノ)といい、明け方に近づくところから明りがさしてくるので、「しののめ明る」という言い方が生じ、その「しののめ」が独立的に明け方を意味する名詞に用いられるようになったのであろう。(用例略)

⑥しののめ【細竹目】《名》未詳。篠を編んで作った簾のようなものをいうか。それぞれ修飾語を受け、序詞として、同音のシノフのシノを起こし、また、簾の奥にこもってひとに逢わない意の「人にはしのび」に続く。(用例略) ↓いなめのめ・いなめのめ

⑦いなめのめ【稲目】未詳。稲藁をあらく編んで住居の壁にし、採光・通風の用とした、その編み目という説もある。

⑧いなめのめ 枕詞。明ヶ去ルにかかる。かかり方未詳。(用例略) 【考】①稲の穂に出そめるのをイナノメといい、それに夜の明けそめるのをたとえた、②寝ノ目の明ク、③鱈ノ目ノ赤、④シノノメ同様明け行く空をいうとする説など、諸説がある。類語シノノメは、万葉では「小竹之眼」「細竹目」と記され、これと「稲目」と考へ合わせるとき、両者は、おのおの文字通り、小竹ノ目、

稲ノ目で、原始的住居に、篠や稲を粗く織った採光・通風の窓がわりのむしろ、そのすきまなどの意かといわれる。(中略) イナノメは、後世シノノメが明クの枕詞として使用されていくうちに語源が忘れられて夜明けの意に使用されるようになったのと同様、明け方を指したのかとも思われる。↓しのめ・め「目」

このように、シノノメに関してはさまざまな解釈があるのが現状である。

私見は、シノノメとイナノメとをつなげて考える点で◎『時別国語大辞典・上代編』の説に近い。シノノメのシノは稲のことなのではないかと考える。ここで、『万葉集』に見えるイナノメという語を見してみる。

相見久 あひみく 厭雖下足 あやだるとしも 稲目 いなめの 明去来理 あきさりとけり 舟出為牟婁 ふねでせむづま

(万一〇・二〇二二)

新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館)には、

いなめの―明クの枕詞。このあとシノノメの語が二四七八・二七五四と見えるが、それとこのイナノメとは共に、原始的住居で篠や稲藁わらが編まれて出入り口に垂され、採光・通風の役目もしていたのと関係があろう。後世では『伊京集』に「篠目、シノノメ、早朝之義、東布」とあるように、そのうちシノノメが夜明けの意味に転ずる。

(三卷・八一頁)

とあり、シノノメのシノを「篠」イナノメのイナを「稲」と捉えている。伊藤博『万葉集釈注五』(集英社)では、

稲の目の「明け」の枕詞。「稲の目」は、窓のない古代の家屋の明かり取りや煙出し部分の稲藁の編み目。その目が明け方に明るくなるのでかかるらしい(井出至『しのめ・いなめ』攷―原始的住居と「め」―万葉第二十号参照)。(四四五頁)

とあり、ここでもイナノメのイナを「稲」と捉えている。

新編日本古典文学全集『万葉集』の解釈のように、イナノメを「稲の目」とすれば、シノノメを「篠の目」とすることは、至って自然のことである。しかし、シノノメのシノもイナノメのイナと同じように「稲」と捉えることもできるのではなからうか。つまり、美称辞シノが元来「稲」を表す語であった、という先の私見をそのままシノノメのシノにも当てはめることができるかと考えるのである。

その根拠として、山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』(有精堂)に挙げられている、サ行の頭語子音の脱落の例をいくつか並べてみる(五七頁)。名詞の例には次の語がある。

イ(代名詞)――シ(代名詞)

イ(息)――シ(息)

ウガラ(族)――スガラ(眷)

ウチ(氏)——スヂ(筋)

山口説によると、これらはそれぞれサ行の頭語子音が脱落した形である。これと同様に、シノとイナも、

イナ(稲)——シノ(稻)

という関係にあると考えることができるのではないだろうか。

その際に問題となるのは、ナとノの母音の違いであろうが、その点は、母音交替が生じたと考えることができる。同じく『古代日本語文法の成立の研究』に、

『おもしろさうし^{變異}・第二版』(「てるしの」の項)には、
テルシノのシノは、シノノメのシノと関係があるうとする
仲原善忠の説を紹介している。シノノメのシノが「光」の
意であったとすれば、

いなのみ(稲目)の明けさりにけり

(万一〇・二〇二二)

とあるイナノメのイナは、シナ(光)の頭子音脱落形という
ことになる。(一四九頁。傍線引用者)

とあり、ここでは、傍線部分からわかるように、シノとシナと
が同じく光の意を表すらしいことが述べられ、イナはシナの頭
子音脱落形であると指摘されている。さらに、先に挙げた村山
七郎「しなてる・てるしの考」に、

枕詞「シナ照ル」のシナと「おもしろ」の「照るシノ」「照

るシナの真庭」のシノ、シナとは同一語と見ることができ
る。日・琉語ともにシナは「光」を意味する言葉である、
と結論できる。(一八八頁。傍線引用者)

とある。

これらの記述では、光を意味するシノとシナとは母音交替の
関係にあると捉えられており、シノとシナとがそのような関係
にあるとすれば、

イナ(稲)——シノ(稻)

とする、先の私見は成立することとなる。

以上の事柄を総合すれば、結局、シナ(sin-a)シネ(sin-e)
シノ(sin-o)イナ(in-a)イネ(in-e)は全て「稲」を意味す
る語であったと考えることができるのではないだろうか。

七、まとめ

本稿では、テルシノのシノについて、主にその原義を中心に
考え、本来「稲」を表す語であったと結論付けた。さらに、神
祭りシノグとの関わりも検討することで、その結論をより強固
なものとするのができたと考ええる。

しかし、このように、シノが本来「稲」を意味したものだ
と結論付けたからといって、「光、太陽の原義」という説を全て
否定するわけではない。すなわち、次のように考えるべきであ
ろう。

①本来シノは、「稲」という具体的なものを表した。

②「稲」は照り輝く美しいもの、尊崇すべきものとして捉えられていた。

③そこから、シノに「照り輝く、光り輝く美しいもの」という美称的な用法が派生していった。

このように、原義を「光・太陽」として片付けてしまわず、その前段階に「稲」を想定すれば、美称辞シノの付く語に、田圃や畑に関係するものが目立つという事実の説明がつく。また、神祭りシノグと美称辞シノとを結び付けて考える場合にも、シノが「稲」を表す語であったとするのが自然である。